

手にする華は

手にする華は

手にする華は

© Araki Kou

昭和五十年十月二十七日 発行

定価 一二〇〇円

著者 荒 亜刺吉

三重県 鈴鹿市 庄野町

製作 (株) 講談社出版 サービスセンター

東京都文京区音羽二一二二
電話 〇三九四五一一一一

印刷 信毎書籍印刷株式会
社 製本 有限会社手塚製本所

目次

青春	6
珈琲の魂	8
秋は魔法使い	10
珈琲の詩	12
秋の主題による変奏曲	14
珈琲讃歌	16
九月になれば	18
汝は	20
悲しみ	22
珈琲セレナーデ	24
落葉	26
雪の精	28
葡萄の園	30

潮騒	68
めぐる季	70
夏	72
盛夏	74
秋の訪れ	76
珈琲	78
移ろい	80
くつろぎ	82
冬の序曲	84
よろこび	86
組曲（秋）	88
珈琲を想う	90
晩秋	92
珈琲一杯いかがです	94
秋のソネット	96
珈琲を語るまえに	98
秋（イメージ）	100
愛情	102

青春	挽歌	想えば	思い出	峠	エル・アマネセール	青春の挽りに	手折れし花よ	冬
120	118	116	114	112		108	106	104
					110			

手にする華は

青春

レモン

の

如^{ごと}き

響^こき

あり

堅^かい

言^{こと}の葉^は

そのものに

甘^{あま}く

すっぱく

ほろ苦^くく

多くは

齧^{かじ}れぬ

それなのに

一度は

手にして

齒に

当てる

珈琲の魂

珈琲の秘めたる色の悩ましさ
香りは蜜なるかぐわしさ
口に出にけりサラセンと
うそぶくごとくつぶやけり

琥珀の色出よ琥珀色

呪文を唱えよアラビアの
秘めたる色を出さんとして
蜜なる香りがんとて
ひくき声にて二度三度

呪文を唱えば生まれけり
呪文を唱えば生まれけり

秋は魔法使い

枯葉

夕陽

淋しき想いは

魔法のせいか

愛がさめる

それも秋

恋が芽生える

それも秋

秋は^{かれ}何も知らないが

魔法にかかる

人は皆

あの鮮かな色彩に

寒き色を混ぜ入れて

人の心をめいらせる

秋という字の悲しさよ

歌を歌えば挽歌なり

切なく歌えば悲歌エレジーか

まわりをつつむ雰囲気は

これもひとえに秋ゆえに

珈琲の詩

うるわしく香りよし
花咲きて匂うかな
秋の夜のうたかたに
まほろし見る乙女ごと

その香りギヤマンの
飾りある室間へやまにて
調べゆるき楽ととも
ひめやかに喫すらん

口をめぐりて舌もまた
まとわりつきて想いあり
異国とくにのうまさかな

じっとり熱き舌のさき

香りは華か珈琲の

匂う乙女の姿見ん

秋の夜半にアラビアを

香りと熱でひたりなむ

秋の主題による変奏曲

秋の日の

陽影さびしき午後ひるさが

風に遊ばれ舞にし落葉

クリーム浮かせし

珈琲の

色を想わす心地する

茶の色は見ようによつては暖い

されど触れなば痛みあり

そんな気もする秋の色

秋の一刻、序奏曲

冬の冷たさ厳しさを